

# 子どもの才能伸ばすために

## 基調講演

幼少期の子どもの教育について考える「朝日教育シンポジウム2019」（朝日新聞社主催）が3月21日、名古屋市中区の朝日ホールで開かれました。未来の日本を支える今の子どもたちにとって必要な学びとは何か、について専門家たちが議論しました。

乳幼児の子育てで大事なことは何か。ママの笑顔なんです。ママがにこやかな表情をしていると、赤ちゃんもにこやかになる。授乳の時期は、赤ちゃんは「うー」「あー」とかしか言わないけど、そこで面と向きあって対話してほしい。「ゆーべ、おまんじゅうを食べちゃったけど、パパには内緒よ」とか何でもいいんです。2歳までは「基本的信頼感の形成」の時期。赤ちゃんにとって、この世界、真っ裸で、何もできない状況で生まれ、自分は無力だけど、ママという存在が絶対的に助けてくれるんだと、そういう安心感、信頼感を形成できるのは2歳くらいまでと言われています。しっかりと抱きしめ、スキンシップしてほしい。

脳科学でいえばドーパミンがでて、幸せな気持ちを体内にみながらさせてくれるんです。うれしい気持ちになるとパワフルで、難しいことも挑戦しようとする。年齢的には2歳までが勝負だと言いますが、教育学の専門家は、子どもの成長、人間の発達に手遅れはありませんと言っています。

また、スマホの依存に気をつけてほしい。スマホ、タブレットを見ながらおっぱいあげて、気がついたら寝ちゃっているとかはダメですよ。授乳期こそ、スマホを手放して、赤ちゃんの目を見つめて対話してほしい。これを絶対守ってほしいんです。

スマホは、実際に手で書いてたり、対面で会話したりするのとの違いが科学的にも明らかになってきました。

学生でも、授業の板書も写真を撮るだけと、手書きでノートをまとめている子の成績は、どっちが良いと思えますか。言うまでもなく、手書き。なぜか。脳科学が明らかにしたが、カシャッと写真を撮った時は、前頭前野、脳で最も重要な部分が動いていない。ところがメモ、手



基調講演で幼少期の教育について話す尾木直樹さん

おき・なおき 中学・高校教師として22年、その後大学教授に転身して22年、教壇に立つ。2017年に定年退職後、現在は法政大学特任教授。「尾木ママ」の愛称で親しまれ、Eテレ「ウワサの保護者会」など多方面で活躍。著書は200冊を超える。

## 尾木直樹さん スマホ置いて 目を見て対話



来場した親子にマイクを向けて会場を沸かせた尾木直樹さん。3月21日午後、名古屋市中区、山本正樹撮影

書きで書き始めると動き始める。

前頭前野がどういう力を持っているかというと、大事なことを覚える力。三つ目はアイデアを生み出す力、想像力。四つ目は感情をコントロールする力。五つ目は状況に応じて判断する力、判断力。学んだ技術や知恵をいかす力。手書きする中で、対話するなかで、それが全部フル回転するんです。

スマホは良い使い方もいっぱいあるが、こんな風にして、脳に与える影響がある。だから上手な使い方をしないと損。対人関係を濃密にする、母子関係を濃密にするのに役立つ使い方をすればいい。そういうのはいっぱい学んでほしい。

最後にまとめをします。じゃ、何をやるべきなのか。外遊び、キャンプ、バーベキューパーティーとか、そういうことをいっぱいしてください。外遊びをいっぱいして、もう一つは、読書の読み聞かせをやれば、子どもは健全に発達すると脳科学者が言っています。特に「原体験」というんですが、火を扱う、火を自分たちでおこしたりとか。あと「水」、子どもは水遊び好きですよ。自由に形が変わるからです。「木」、いよいよおいしそうです。倒木から芽が出てくる、感動ですよ。命ってすごい。土に触れること。団子をつくったりというのも大事。それと草の遊び。草木染が出来たり、いい匂いがしたり。

それから、大事な動物体験。ワンちゃん、ネコちゃんでも飼うと子どもの情緒教育にいい。犬は、どれだけ呼びかけてもワンワンとしかいわない。そうすると、どうしてなんだろうと、相手の気持ちに寄り添って考える。だから共感能力が高くなるんです。

最後は「ゼロ体験」って言うんですけど、真っ暗な暗闇を体験してみとか。夏場、海岸で暑い、灼熱の体験をしてみる。そういう体験で自然の偉大さを感じること重要。原体験を大事にしてほしいと思います。

「うちの子、才能無いわ」という方、そんなことありません。一日2時間でも、わが子を観察していればその子の才能が見えてきます。その子の興味関心があるところが才能なんです。そこを伸ばすのが、僕は乳幼児教育で大事なポイントだと思っています。

## パネル討論

日高 モンテッソーリ教育は、将棋の藤井聡太七段が学んだことでも注目された。村瀬さんの園ではどんなことを？

村瀬 モンテッソーリは自由を尊重しながら自主性を伸ばす教育。教具を使った「お仕事」と呼ばれる遊びの時間があり、子どもは自分でやりたい教具を選んで、時間制限無く、やりたいだけやる。

次に「日常生活の練習」というのがあり。日常生活の動作を分析し、各部分を順序立てて示す。例えば、鼻のかみ方。まず紙を広げ、手の上に、鼻にあて、右、左と分け片方ずつかむ、というような動作を順序立ててやってみせる。幼児期に日常生活の練習を徹底してやると「段取りが良い」「わずかな差異に気づく」などの特性を示すようになる。

日高 0〜2歳の英語教育についてはどんなことを？

村瀬 英語を理解させようという風には思っていない。担当する先生が外国人の講師。これは、共に過ごし、日本以外の国の人からも優しさ、温かさを受け取ること。将来、世界に出た時に自然な対応ができるようになってほしいから。多様な世界を経験できることが財産になると思っている。

尾木 英語教育は早いほど良いと思う。発音では、日本語の母音は「あいうえお」の5音しかないが、英語は10〜20ぐらい。子どもはこれを話せる力を元々持っている。ところが、日本語しか使わない環境にしていると、他がさびびってしまふ。だから早期に接した方が良いと思う。

日高 幼少期のICT（情報通信技術）教育はどんなことを？

佐藤 家庭、幼稚園で使われるICT教育を両面から検証している。家庭でのICT教育で、お話を作りのソフトウェアの開発を紹介したい。まず、大人に物語の読み聞かせしてもらった後、後半部分を子どもが自分なりにお話をつくソフト。あくまでも、一人づ

## わかばコスモ保育園・村瀬陽子園長 やりたい教具でやりたいだけ「お仕事」



むらせ・ようこ わかばコスモ保育園、わかばコスモインターナショナルスクール園長。子どもの集中力や自主性を育むモンテッソーリ教育や、幼少期から英語のイメージを頭の中に入れて「グローバルシフトプログラム」を採り入れた幼児教育を行っている。

## パネルリスト（敬称略）

- 尾木直樹（教育評論家）
- 村瀬陽子（わかばコスモ園長）
- 佐藤朝美（愛知淑徳大学准教授）
- コーディネーター
- 日高奈緒（朝日新聞記者）

## ICT活用 幼児期の出会い方が大事

日高 実際にソフトを使ってみて、子どもの成長は？

佐藤 自分の気持ちがあまく言葉に出てこない子はソフトウェアを通じて出せる時もある。遊びを通して話すスキルが育つこともある。

尾木 スマホに子守をさせちゃうのは100%間違い。佐藤さんが言うのは、親子関係を強めるツールとして使っている。使い方としては高度で、使いこなす親御さんが出てくるのに、時間を要するんじゃないかと思う。うまく使いこなせるようになってほしいと思う。

日高 幼少期の教育は、なぜ大切なのか。

尾木 基本的な信頼関係をどう培うかがポイントで、かつてはIQ（知能指数）の時代だった。今は、HQの時代と言われる。ヒューマニティーのH。人間力指数と言ってもいい。なぜかというところ、AI（人工知能）の時代がやってきて、知識をため込んで素早くアウトプットするのはAIの方がはるかに優れている。2030年と

## AIとの共存時代へ「生き延びる力」を 尾木さん



朝日教育シンポジウムには多くの聴衆が詰めかけた

AIとの共存時代が来ると言われるなか、どう学力、知力を持つた子どもを育てないといけないか。昨年あたりから報告が出てきて、学力の定義を「生き延びる力」とした。そこで出た三つの要素を言うと、一つは「新しい価値を創造する力」。古いことを暗記して言えれば良い時代ではない。二つ目は「緊張とストレスの調整能力」。人間関係だけでなく、自然災害もそう。どう減災していくか、調整能力が問われている。3番目は「責任を取る能力」。自分で良い結果であれ、失敗であれ、自分を客観視して説明できる能力。これが学力の中心的な柱となる。2020年の大学入試改革もそれに沿っている。小学校から大学まで学び方、教え方ががらっと変わり、教えから学びへのサポートに切り替わる。教え込むのではなく、学んでいこうとする環境づくりに重点を置くこととする。

村瀬 モンテッソーリ教育では「敏感期」という言葉がある。ある特定の事柄に対して強い感受性が表れ、その事柄をとっても簡単に吸収する時期がある。特定の機能を身につけるための大切な時期を逃さないということで、幼少期の教育に必要なものもあると思っています。

佐藤 ICT研究者として言いたいのは、幼児期に体験するメディアが一生の道具としての評価につながる。一番最初に「ゲームをするためのツール」として認識するよりは、「友達と何かを達成できるツール」「いろんなことを調べられるツール」として認識できれば、その後のICTの活用の仕方が違ってくると思う。ICTの使い方として、くれぐれも「何かを我慢した我慢としてゲーム10分間やらせてあげる」というのはやめようという話になっている。幼児期のメディアとの出会い、評価の仕方も大事だと思ふ。

日高 ICT研究者として言いたいのは、幼児期に体験するメディアが一生の道具としての評価につながる。一番最初に「ゲームをするためのツール」として認識するよりは、「友達と何かを達成できるツール」「いろんなことを調べられるツール」として認識できれば、その後のICTの活用の仕方が違ってくると思う。ICTの使い方として、くれぐれも「何かを我慢した我慢としてゲーム10分間やらせてあげる」というのはやめようという話になっている。幼児期のメディアとの出会い、評価の仕方も大事だと思ふ。

日高 ICT研究者として言いたいのは、幼児期に体験するメディアが一生の道具としての評価につながる。一番最初に「ゲームをするためのツール」として認識するよりは、「友達と何かを達成できるツール」「いろんなことを調べられるツール」として認識できれば、その後のICTの活用の仕方が違ってくると思う。ICTの使い方として、くれぐれも「何かを我慢した我慢としてゲーム10分間やらせてあげる」というのはやめようという話になっている。幼児期のメディアとの出会い、評価の仕方も大事だと思ふ。

日高 ICT研究者として言いたいのは、幼児期に体験するメディアが一生の道具としての評価につながる。一番最初に「ゲームをするためのツール」として認識するよりは、「友達と何かを達成できるツール」「いろんなことを調べられるツール」として認識できれば、その後のICTの活用の仕方が違ってくると思う。ICTの使い方として、くれぐれも「何かを我慢した我慢としてゲーム10分間やらせてあげる」というのはやめようという話になっている。幼児期のメディアとの出会い、評価の仕方も大事だと思ふ。

日高 ICT研究者として言いたいのは、幼児期に体験するメディアが一生の道具としての評価につながる。一番最初に「ゲームをするためのツール」として認識するよりは、「友達と何かを達成できるツール」「いろんなことを調べられるツール」として認識できれば、その後のICTの活用の仕方が違ってくると思う。ICTの使い方として、くれぐれも「何かを我慢した我慢としてゲーム10分間やらせてあげる」というのはやめようという話になっている。幼児期のメディアとの出会い、評価の仕方も大事だと思ふ。

日高 ICT研究者として言いたいのは、幼児期に体験するメディアが一生の道具としての評価につながる。一番最初に「ゲームをするためのツール」として認識するよりは、「友達と何かを達成できるツール」「いろんなことを調べられるツール」として認識できれば、その後のICTの活用の仕方が違ってくると思う。ICTの使い方として、くれぐれも「何かを我慢した我慢としてゲーム10分間やらせてあげる」というのはやめようという話になっている。幼児期のメディアとの出会い、評価の仕方も大事だと思ふ。